(1)青柳寅雄(1932):柑橘煤点病と其薬剤散布適期に関する研究。徳島県立農事試験場	
 (1)育柳寅雄(1932):相橋煤点柄と其楽剤散布適期に関する研究。徳島県立晨事試験場 (2)青柳寅雄(1933):楊梅を寄主とする白藻病に就て。 日園雑、45(2):4pp. (3)青柳寅雄(1934):蒟蒻白絹病に就て。 大日本農会報、(589):10pp。 	
 (4)青柳寅雄・鎌田衛(1935): 石灰ボルドー液の胡瓜生育並に収量に及ぼす影響。 病虫雑、22(1): 47~50。 (5)青柳寅雄(1936): 栗胴枯病に関する研究。 徳島農事試特別報告、(1) 	
 (6)佐々木成則・石井博(1952):稲白葉枯病抵抗性品種導入に関する研究(予報)、(講要)。 日植病報、17(1):42。 (7)石井博(1952):麦類赤黴病の分生胞子飛散と第2次伝染。 中国四国農研、(1):45~47。 (8)石井博・小山弘(1952):麦類赤黴病の分生胞子飛散と第2次伝染。 	
農及園、27(3):397~398。 (9)佐々木成則(1953):稲白葉枯病抵抗性品種導入に関する研究(講要) 日植病報、17(3~4):154。 (10)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレサン石灰の稲熱病防除効果に関する研究。 セレサン石灰の稲熱病防除効果比較試験。	
中国四国農研、(3):19~20。 (11)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレサン石灰の稲熱病防除効果に関する研究。セレサン石灰の薬害に関する試験。 中国四国農研、(3):25~26。	
 (12)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレサン石灰の稲熱病院除効果に関する研究。セレサン石灰による白葉枯病防除試験、中国四国農研、(3):39。 (13)石井博・柏木弥太郎(1953):本邦における麦類赤黴病の流行機構に関する研究(第1報)(講要)。 日植病報、17(3~4):160。 	
 (14)石井榑・柏木弥太郎(1953):麦類赤黴病の第1次伝染と稲株並びに防除に関する一知見(講要)。 日植病報、18(1~2):89。 (15)石井博・柏木弥太郎・佐々木成則(1953)本邦における麦類赤黴病の流行機構に関する研究(第1報)。 徳島農試研報、(1):10~16。 	
 (16)佐々木成則・柏木弥太郎・石井博(1953):ダイコンバイラス病防除に関する研究(第1報)。 徳島農試研報、(1):36~39。 (17)石井博(1954):麦赤黴病の流行と気象。 植防、8(4):3~8。 (18)石井博・柏木弥太郎(1954):ダイコンバイラス病と前作との関係、土壌PHの推移と 	
ダイコンバイラス罹病度との関係。(講要)。 日植病報、19(1~2):72。 (19)石井博・柏木弥太郎(1955):麦類赤黴病の防除に関する二、三の知見(講要)。 日植病報、19(3~4):162~163。 (20)石井博(1955):本邦における麦類赤かび病の流行機構に関する研究(第3報)発生型と	
その予察(I)講要。 日植病報、20(2~3):108。 (21)石井博・谷幸泰(1956):稲紋枯病の発生推移に関する二、三の知見(講要)。 日植病報、20(4):191~192。	
 (22)石井博・谷幸泰(1956):稲紋枯病に関する研究(1)、稲紋枯病に対する Creosot oil の効果 (講要)。 日植病報、21(2~3):103~104。 (23)石井博(1957):水稲早期栽培における稲紋枯病の収量構成に及ぼす影響(講要)。 日植病報、22(1):7。 (24)石井博・岡田一一(1957):稲紋枯病に対する Creosot oil の効果(第2報)(講要)。 	
日植病報、22(1):53~54。 (25)石井博(1957):水稲早期栽培における稲紋枯病の収量構成に及ぼす影響。 徳島農試研報、(2):16~19。 (26)石井博・稲木守(1957):ツーツェットの稲紋枯病防除効果に関する研究。生石灰加用 ツーツェットの稲紋枯病防除効果比較試験、	
ツーツェットの稲紋枯病防除効果比較試験、 四国農研、(2):18~19。 (27)佐々木成則・片島由雄・柏木弥太郎(1957):ツーツェットの稲紋枯病防除効果に関する 研究。ツーツェットの濃度および散布回数と稲紋枯病防除効果に関する試験。 四国農研、(2):8~9。	
(28)石井博・柏木弥太郎(1958):水稲品種の稲紋枯病に対する耐病性の機作(予報)(講要)。 日植病報、22(1):5。(29)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1958):小銹病に対する石灰硫黄合剤の防除効果に 関する試験。 四国農研、(4):7~8。	
(30)石井博・柏木弥太郎(1959):水稲早期栽培に伴う病害の流行機構に関する研究第1報。稲紋枯病。徳島農試研報、(4):11~20。(31)石井博・川尻啓介(1959):麦類赤黴病の分生胞子形成と栄養条件(講要)。 日植病報、24(1):51。	
(32)石井博・川尻啓介(1959):麦類赤黴病の分生胞子形成と栄養条件(II)(講要)。 日植病報、24(1):11。(33)石井博(1959):麦類赤黴病の流行とその防除法。 農及園、35(5):821~824。	
 (34)佐々木成則・柏木弥太郎(1960):有機水銀剤の散布時期と稲クビ、シコウイモチ病の 防除について。 四国農研、(7):56~64。 (35)柏木弥太郎(1960):水稲穂枯症に関する研究、第1報。秋落水田における晩期追肥と 有機水銀剤散布が穂枯症および収量に及ぼす影響。 徳島農試研報、(5):16~19。 	
(36)石井博・川尻啓介(1960):ムギ類赤黴病の流行機溝に関する研究(第10報)。潮風の 本病に及ぼす影響(講要)。 日植病報、25(5):225。 (37)石井博・谷幸泰・稲木守(1960):レンコン腐敗病の防除に関する研究。石灰窒素と	
マンガン肥料の併用効果(講要)。 日植病報、25(1):24。 (38)石井博・片島由雄(1960):レンコン腐敗病と土壌Ehとの関係(講要)。 日植病報、25(1):56。 (39)石井博・川尻啓介(1961):ムギ類赤黴病の流行機溝に関する研究(第11報)。潮風の	
本病に及ぼす影響(2)(講要)。 日植病報、26(2):53。 (40)石井博(1961):ムギ類赤黴病と流行機関に関する研究。 病虫発予特別報告(8)、徳島農試特別報告、(3)。 (41)石井博・川尻啓介(1962):ムギ類赤黴病に対する界面活性剤加用散布薬剤の防除効果(講要)	
日植病報、27(5):260。 (42)石井博・川尻啓介(1962):キュウリの蔓枯病併発細菌性病害と薬剤防除に関する知見(講要) 日植病報、27(2):69。 (43)柏木弥太郎・佐々木成則・平井篤造(1964):稲縞葉枯病の細胞内封入体について 第1報。 2、3の感染植物の封入体と封入体による診断(講要)。	
日植病報、29(2):73。 (44)柏木弥太郎・佐々木成則・平井篤造(1964):イネくろすじ萎縮病罹病稲の細胞の変異と 封入体の染色性(講要)。 日植病報、29(5):270。	
(45)T.Hiraf,N.Suzuki、I.Kimura、M.Nakazawa,and Y.Kashiwagi(1964):Large Inculusion Bodies Associated with Virus Diseases of Rice.Phytopathology.54(3):367~368。 (46)山本勉・川尻啓介(1964):Rhizoctonia 菌によるシロウリの実腐れについて(講要)。 日植病報、29(2):63。 (47)山本勉・片島由雄・川尻啓介(1965):畦畔散布機によるイネ、ムギ主要病害の防除効果に	
及ぼす展着剤加用量の影響(諸要)。 日植病報、30(2):106。 (48)松井千秋・柏木弥太郎・日比野啓行・林隆治・藤沢一郎(1965):イネ縞葉枯病の結晶封入体 の微細構造(講要)。 日植病報、30(5):298。	
 (49)柏木弥太郎(1966):イネくろすじ萎縮病イネの細胞の異常と封入体の染色性(講要)。 日植病報、32(3):168~170。 (50)柏木弥太郎・佐々木成則(1966):イネ縞葉枯病罹病植物の細胞封入体について(1)。 徳島農試研報、(8):21~24。 	
 (51)柏木弥太郎(1966):イネくろすじ萎縮病罹病イネの細胞の異常と封入体の染色性。 徳島農試研報、(8):25~26。 (52)山本勉(1966):施設野菜病害と防ぎ方ハウストンネル栽培のナス、ピーマン。 植防、20(10):19~21。 (53)山本勉・川尻啓介(1966):コンニャク葉枯病の伝播様相と暴風雨に関連した薬剤防除の 	
時期について(講要)。 日植病報、32(2):98。 (54)山本勉・片島由雄・川尻啓介(1967): 畦畔散布機による病害防除効果と展着剤加用量 との関係について。 徳島農試研報、(9):35~40。	
(55)山本勉・川尻啓介(1967):コンニャク葉枯病の防除について。 四国植防研、(2):61~72。(56)山本勉・川尻啓介(1967):徳島県下におけるコンニャク病害の発生と被害について。 徳島農試研報、(9):27~34。	
(57)山本勉・川尻啓介・酒井勇夫・福西務(1968):イネ紋枯病防除に対する広巾散布用動力噴霧機の使用方法について(講要)。 日植病報、34(3):191。 (58)山本勉・川尻啓介・酒井勇夫・福西務(1968):イネ紋枯病防除に対する広巾散布動力噴霧機の使用方法について。 徳島農試研報、(10):21~28。	
(61)山本勉(1968):キュウリ緑斑モザイク病の発生と被害に及ぼす影響。 四国植防研、(3):47~57。(62)山本勉(1969):ナス斑点細菌病の発生に及ぼす環境条件と防除薬剤(講要)。 日植病報、35(5):383~384。	
 (63)山本勉・福西務(1969):Rhizoctonia菌によるネギ苗立枯病の薬剤防除。 四国植防研、(4):55~58。 (64)山本勉・川尻啓介(1969):カスガマイシンのトマト葉かび病防除効果とその解析。 徳島農試研報、(11):25~32。 (65)山本勉・福西務(1970):イチゴ炭そ病について(講要)。 日植病報、36(3):165~166 	
(66)山本勉・福西務(1970): オテコ灰ぞ病について(講要)。 日植病報、36(3): 165~166。 (66)山本勉・川尻啓介(1970): シロウリの実腐れとその防除。 四国植防研、(5): 71~78。 (67)山本勉(1970): 徳島県におけるハウス栽培のキュウリおよびナスの病害と防除。 植防、24(7): 4~7。	
植防、24(7):4~7。 (68)山本勉(1971):徳島県におけるキュウリ緑斑モザイクウィルス病の防除。 植防20周年記念誌、323~325。 (69)山本勉(1971):イチゴの新病害「炭そ病」。 植防、25(2):21~24。	
 (70)福西務・須藤真平・山本勉(1971):ウリ類疫病による被害の実態。 四国植防研、(6):95~100。 (71)山本勉・福西務(1972):バリダシンによるイネ紋枯病の防除とくに散布時期、回数、間隔について。 四国植防研、(7):13~20。 	
(72)山本勉、上原等(1972):ネギ、タマネギの苗立枯病とその防除。 植防、26(4):19~22。(73)柏木弥太郎・田村礼二(1973):ハス褐斑病(新称)について(1)発生と病原菌(講要)。 日植病報、39(3):202。	
 (74)山本勉・川尻啓介(1973):水和剤(粉体)の少量散粉によるハウス病害の防除。 四国植防研、(8):29~36。 (75)福西務・山本勉・須藤真平(1973):キクさび病に対する薬剤防除について。 四国植防研、(8):37~42。 (76)福西務・加々美好信(1974):非水銀剤による種もみ消毒効果。 	
四国植防研、(9):105~108。 (77)柏木弥太郎(1974):ハス褐斑病について(2)薬剤防除(講要)。 日植病報、40(3):219。 (78)山本勉(1974):ナス褐斑細菌病の生態と防除。	
植防、28(II):31~34。 (79)生越明・福西務・酒井隆太郎(1974):エンドウのすそ枯れ症状に関する研究。エンドウからの Aphanomyces euteiches の分離とエンドウに対する病原性(講要)。日植病報、40(3):194。 (80)福西務(1974):コルディリーネの疫病(新病害)(講要)。	
日植病報、40(2):138。 (81)柏木弥太郎(1975):ハス褐斑病について(3)発生の生態(講要)。 41(3):266。 (82)福西務・須藤真平・山下定利・岡田小太郎・生越明・酒井隆太郎(1975):エンドウすそ枯症状に関する研究(2)徳島県における発生生態と土壌検診(講要)。	
日植病報、41(3):273。 (83)山本勉・川尻啓介(1975):イチゴ果実の病害防除効果に及ぼす液剤の散布量と展着剤加用量の影響。 四国植防研、(10):35~40。 (84)山本勉・福西務・川尻啓介(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第1報)ナス	
黒枯病の発生消長および発生環境。 徳島農試研報、(14):49~58。 (85)福西務・山本勉(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第2報)ナス黒枯菌の生理 生態および伝染経路。 徳島農試研報、(14):59~74。	
(86)福西務・山本勉(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第3報)ナス黒枯病の薬剤 防除とその効果の解析。 徳島農試研報、(14):75~82。 (87)山本勉(1975):キュウリ緑斑モザイク病に関する研究とくに発生環境、伝搬方法ならびに 防除法について。	
徳島農試特別報告、(5) (88)福西務・山本勉(1975):コルディリーネの疫病の発生。 四国植防研、(10):41~48。 (89)福西務・生越明・黒島忠司・美馬克美・山本英記(1976):徳島県下で発生したサツマイモかいよう病の病徴、ほ場環境および薬剤防除(講要)。	
日植病報、42(3):339。 (90)福西務・生越明・酒井隆太郎(1976):徳島県下におけるエンドウ"すそ枯れ症状"をひきおこす Aphanomyces euteiches DRECHSLER。 日植病報、42(1):53~55。	
 (91)福西務(1977): Stemphylium 属菌によるニンニクの葉枯病(新称)(講演)。 日植病報、43(1):86。 (92)柏木弥太郎・山本勉(1977): 冬ダイコンに発生する横縞症について(予報)(講要)。 日植病報、43(3):343。 (93)富永時任・西山幸司・山本勉(1977): Pseudo-monas cichorii によるナスの褐斑細菌病。 	
日植病報、43(5):569~574。 (94)柏木弥太郎(1977):ハス褐斑病の発生生態と防除。 徳島農試研報、(15):21~32。 (95)福西務(1977):土壤くん蒸剤のマルチ畦内消毒による土壤病害防除(1)クロルピクリン くん蒸剤による土壌消毒の効果と薬害に関する基礎的調査。	
徳島農試研報、(15):33~42。 (96)山本勉・金磯泰雄(1977):微粉剤の少量散布(フローダスト)によるハウス病害虫の防除。 徳島農試研報、(15)43~54。 (97)山本勉・金磯泰雄・須藤真平・山下定利・岡田小太郎(1978):徳島県における昭和51年	
度箱育苗のごま葉枯病多発生原因と薬剤防除。 四国植防研、(12):7~14。 (98)金磯泰雄・柏木弥太郎(1978):オオムギ斑葉病に対する種子消毒の効果。 四国植防研、(13):43~48。 (99)福西務(1978):ホウレンソウ根腐れ症状株とその土壌から分離される病原菌(講要)。	
日植病報、44(1):86。 (100)西山幸司・山本勉・梅川学・江塚昭典(1978):Pseudomonas viridiflava によるトマト 黒斑細菌病(新称)(講要)。 日植病報、44(3):378~379。 (101)福西務(1978):ナス黒枯病防除薬剤の効力低下(予報)(講要)。	
日植病報、44(3):404。 (102)山本勉・金磯泰雄(1978):水管理とくに夏季の落水がハス腐敗病の発生におよぼす影響。 四国植防研、(12):39~42。 (103)山本勉・金磯泰雄(1978):スイカ台ユウガオの根腐病。	
徳島農試研報、(16):66~68。 (104)金磯泰雄(1979):オオムギあかぎ二条の種子消毒法。 四国植防研、(4):19~24。 (105)西山幸司・山本勉・梅川学・江塚昭典(1979):Pseudomonas viridiflava によるトマト 黒斑細菌病。	
日植病報、45(2):221~227。 (106)西山幸司・福西務・寺田孝重・江塚昭典(1979):Xanthomonas carotae によるニンジン 斑点細菌病の本邦における初発生。 日植病報、45(5):683~688。 (107)山本勉(1979):べと病菌によるハナヤサイの"入れ墨"症状。	
四国植防研、(14):43~44。 (108)山本勉・川尻啓介・金磯泰雄(1979):薬剤散布の時期・間隔・病斑摘去などが病害防除効果に及ぼす影響。 徳島農試研報、(17):25~37。 (109)松尾卓見・宮下秀子・福西務(1979):徳島県下に多発したサツマイモかいよう病の病原	
Fusarium 菌(講要)。 日植病報、45(1):80。 (110)山本勉・金磯泰雄(1981):ハウス内稲わら施用によるイチゴ灰色かび病の防除。 農及園、56(1):42~44。 (111)金磯泰雄・酒井勇夫(1981):おが屑堆肥の施用と土壌病害(第1報)おが屑堆肥に混入	
(111) 金銭券雄・	
(113)金磯泰雄・黒島忠司(1982):おが屑堆肥の施用と土壤病害(第2報)おが屑堆肥の運用が ダイコン根部黒変症の発生に及ぼす影響。 四国植防研、(17):51~63。 (114)金磯泰雄(1982):ダイコン根部黒変症(横しま)に関する研究。 総合助成報告書:75~98。	
 (115)金磯泰雄・山本勉(1982):ハウス内稲わら施用におけるわらの吸湿条件ならびに作物の生育、収量と2,3病害の発生に及ぼす影響。 徳島農試研報、(20):6~14。 (116)金磯泰雄・柏木弥太郎(1983):ダイコン幼苗期の根部黒変と立枯について(第1報)発生原因と薬剤防除。 	
四国植防研、(18):29~38。 (117)山本勉・金磯泰雄(1983):イチゴうどんこ病の発生生態と防除に関する研究。 徳島農試特別報告、(6):1~69。 (118)金磯泰雄(1983):ムギうどんこ病の冬季多発生と薬剤防除の効果。	
徳島農試研報、(21):27~33。 虫 害 (1)徳島県立農事試験場(1922):藍作害虫に関する調査。徳島県立農事試験場	
 (2)徳島県立農事試験場(1926):梨の姫心喰虫駆除予防試験成績予報。徳島県立農事試験場 (3)青柳寅雄(1938):栗実虫モモゴマダラノメイガ防除成績。 徳島農事試特別報告、(5)。 (4)坪井武夫(1950):徳島に於けるサンカメイチュウの発生予察に関する研究(I)、第1化期の発生と冬季の気象との相関及び予察法について。 	
応昆、6(4):163~171。 (5)坪井武夫・柏木弥太郎・野口義弘(1952):ルビーロームシの寄生蜂ルビーアカヤドリコバチ (Anicetus ceroplastes Is II)導入に関する2,3の知見。 中国四国農研、(1):66~68。 (6)以西信夫(1953):稲葉の損失が生育収量に及ぼす影響。	
徳島農試研報、(1):17~22。 (7)坪井武夫・以西信夫・野口義弘(1953):BHCによるエンドウゾウムシ防除に関する 二、三の知見(予報)。 中国四国農研、(4):41~42。	
 (8)坪井武夫(1954):サンカメイチュウの発生予察に関する研究(Ⅱ)。発蛾時期及び発蛾量相互の関係について。中国四国農研、(5~6):127。 (9)坪井武夫・野口義弘(1954):ニカメイチュウ第1化期後期発蛾量の予察。中国四国農研、(5~6):125~126。 (10)小林尚(1954):苗代における薬剤散布が昆虫相の変動に及ぼす影響について。 	
 (10)小林尚(1954):苗代における薬剤散布が昆虫相の変動に及ぼす影響について。 応動昆講演要旨:12。 (11)坪井武夫(1955):徳島におけるサンカメイチュウの発生型について。 応昆、11(4):150~155。 (12)坪井武夫・野口義弘(1955):サンカメイチュウによる稲の被害調査法に関する研究。 	
 (12)坪井武夫・野口義弘(1955):サンカメイチュウによる稲の被害調査法に関する研究。 徳島農試特別報告、(1)。 (13)小林尚(1955):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動。 応動昆講演要旨:17~18。 (14)小林尚(1956):殺虫剤散布による昆虫相の変動について(3)。 応動昆講演要旨:22~23。 	
応動昆講演要旨:22~23。 (15)小林尚・野口義弘(1956):イネクロカメムシ防除法の研究(第1報)イネクロカメムシの パラチオンに対する抵抗性について。 応昆、12(2):82~85。 (16)小林尚(1956):稲作害虫に対する殺虫剤散布必要度合の予想方法確立に関する研究(1)。	
予察灯のニカメイガ誘殺数による被害茎率の予想方法について。 四国農研、(1):69~71。 (17)坪井武夫(1956):土壤中のBHCが作物の生育および収量に及ぼす影響。 応動昆シンポジウム講演要旨:38~41。 (18)坪井武夫・小林尚・以西信夫・野口義弘(1956):土壤中のBHCが作物の生育、収量に	
 (18)坪井武夫・小林尚・以西信夫・野口義弘(1956):土壤中のBHCが作物の生育、収量に及ぼす影響。 応昆、12(4):177~189。 (19)小林尚・野口義弘(1957):水稲の早晩期栽培とニカメイガの産卵選択性との関係。 徳島農試研報、(2):19~21。 (20)小林尚(1957):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動(4)殺虫剤散布後のツマグロヨコバイ 	
増加の原因について。 応動昆講演要旨:20。 (21)小林尚・野口義弘(1957):ティプテレックスのニカメイチュウ防除効果。 徳島農試研報、(3):10~11。	
 (22)以西信夫・山下定利(1957):ニカメイチュウ第2化期発蛾最盛日の予察について。 徳島農試研報、(3):12~14。 (23)小林尚・野口義弘(1957):イネクロカメムシ防除法の研究(Ⅱ)。イネクロカメムシのBHCに対する抵抗性について。 応動昆、1(1):36~40。 	
 (24)小林尚(1957):新白塗剤による柑橘のゴマダラカミキリの産卵防止。 応動昆、1(4):224~253。 (25)小林尚(1957):農薬の新しい使用 Setting に関する研究(第1報)。 農及園、32(1):63~64。 	
(26)小林尚(1958):殺虫剤散布による昆虫相の変動(5)。水田におけるクモの役割について。 応動昆講演要旨:14。 (27)小林尚(1958):稲作害虫に対する殺虫剤散布必要度合の予想法確立に関する研究(第2報) 予察灯の誘殺力の比較並びに被害茎率発生予察式の適用範囲の拡張。 四国農研、(3):97~99。	
 (28)小林尚(1958):農薬の新しい使用法 Setting に関する研究(第2報)。 四国農研、(3):100~102。 (29)以西信夫(1959):サンカメイガの発生と被害の変動及び被害面積との関係。 徳島農試研報、(4):21~25。 (30)以西信夫・山下定利(1959):ニカメイチュウ第2化期発蛾最盛日の予察について。 	
四国農研、(5):85~87。 (31)小林尚(1959):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動に関する研究(VI)。殺虫剤散布によるクモ類の減少とツマグロヨコバイおよびウンカ類の増加の薬剤による差異。 応動昆講演要旨:21。	
(32)小林尚(1960):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動に関する研究(VII)。殺虫剤散布による クモ類の減少とツマグロヨコバイおよびウンカ類の増加の殺虫剤の種類および散布時期による 差異。 応動昆講演要旨:8~9。 (33)小林尚(1960):天敵利用と薬剤防除とどのように調和させるか、薬剤散布と害虫の異常な 増殖。	
増殖。 応動昆シンポジウム講演要旨:61~64。 (34)小林尚(1960):水田天敵。 植防、14(11):31~34。 (35)以西信夫・山下定利(1960):ニカメイガの幼虫寄生蜂について。	
四国農研、(6):109~112。 (36)藤田育資・以西信夫・山下定利(1960):水稲早期栽培のニカメイチュウ防除時期について。 徳島農試研報、(5):20~22。 (37)小林尚(1961):ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布がウンカ、ヨコバイ類の生息密度に及ぼす 影響に関する研究。	
影響に関する研究。 徳島農試特別報告、(3)発生予察特別報告、(6)。 (38)以西信夫・山下定利(1962):徳島県下におけるニカメイチュウおよびサンカメイチュウの 発生傾向について。 徳島農試研報、(6):13~14。 (39)小林尚(1962):徳島県下に大発生したタケの新害虫。	
植防、16(2):1~6。 (40)小林尚・丸尾包治・岡部文・杉本喜則(1962):タケアツバに関するこれまでの知見と昭和 36年度の防除。 徳島農試研報、(6):34~41。	
 (41)以西信夫・山下定利(1964):ニカメイチュウの発蛾最盛期予察法について。 四国農研、(9):27~29。 (42)谷幸泰(1964):鳴門地方におけるサツマイモ害虫の発生予察および防除てんまつ。 植防、18(9):25~27。 (43)永井洋三・以西信夫(1965):徳島県内予察灯の誘殺状況にみられる2,3の害虫発生の 	
 (43)永井洋三・以西信夫(1965):徳島県内予察灯の誘殺状況にみられる2,3の害虫発生の地域差。 応動昆講演要旨:13。 (44)永井洋三・山下定利(1966):徳島県下におけるイネ縞葉枯病の後期発病とその防除。 四国植防研、(1):6~8。 (45)永井洋三・佐々木成則・以西信夫・日和田太郎(1966):MEP乳剤浸漬によるネダニの防除 	
関西病虫研、(9):112~113。 (46)以西信夫・日和田太郎(1967):徳島県におけるツマグロヨコバイのマラソン抵抗性について 応動昆講演要旨:21。 (47)以西信夫・日和田太郎・須藤真平(1967):徳島県におけるツマグロヨコバイのマラソン	
抵抗性について。 徳島農試研報、(9):41~43。 (48)野口義弘(1967):ネグサレセンチュウの検出方法に関する研究。ミナミネグサレセンチュウ 検出法としてのインキュベイション法について。 四国植防研、(2):79~82。	
 四国値防研、(2): 79~82。 (49)山下定利(1968): 徳島県山岳部におけるセジロウンカ、トビイロウンカ生息状況について。 四国植防研、(3): 39~42。 (50)山下定利・永井洋三(1968): ウンカ類の異常飛来現象に関する研究(第1報)1966年 および1967年の全国各地予察灯におけるセジロウンカ、トビイロウンカの誘殺状況。 徳島農試研報、(10): 41~46。 	
(51)永井洋三・山下定利(1968):昭和41年・42年のウンカ類飛来状況とその考察。 応動昆講演要旨:17。(52)以西信夫(1968):ツマグロヨコバイに寄生するアタマアブ類の発生および寄生状況。 徳島農試研報、(10):35~40。	
(53)須藤真平(1968):徳島県板野郡下のニカメイチュウ第2世代被害激甚地における被害実態と 栽培慣行。 徳島農試研報、(10):29~34。 (54)永井洋三・山下定利(1969):ウンカ類の異常飛来現象に関する研究(第2報)セジロウンカ およびトビイロウンカの日本各地への飛来状況。	
徳島農試研報、(11):35~41。 (55)以西信夫・谷幸泰(1969):そ菜害虫に対するランネートの効果。 四国植防研、(4):65~75。 (56)以西信夫・柏木弥太郎・谷幸泰(1969):レンコンおよびイネを加害するイネネクイハムシの発生と防除。	
発生と防除。 四国植防研、(4):79~86。 (57)長江十一(1969):モモゴマダラノメイガの発生消長と防除(第1報)。 徳島良試研報、(11):33~34。 (58)永井洋三・須藤真平・日和田太郎(1970):徳島県におけるイネツトムシ第2世代の発生消長	
(58)永井洋三・須藤真平・日和田太郎(1970):徳島県におけるイネツトムシ第2世代の発生消長と薬剤防除。 四国植防研、(5):51~58。	
(59)小林尚・野口義弘・錦野正臣・須藤真平・池本五郎・長江十一(1971):稲作害虫に対する 殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度 合の予想 応動見 15(3):121~131	
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度	
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想 応動昆、15(3):121~131。 (60)野口義弘(1971):殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。 応動昆講演要旨、7。 (61)山下定利(1971):簡易自動式予察燈の作り方。 植防、25(4):29~30。 (62)野口義弘(1972):殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食入ニカメイチュウ に対する降雨の影響。 徳島農試研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973):水田の節足動物相ならびに これに及ぼす殺虫剤散布の影響(第1報)水田の節足動物相概観。	
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想 応動昆、15(3):121~131。 (60)野口義弘(1971):殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。 応動昆講演要旨、7。 (61)山下定利(1971):簡易自動式予察燈の作り方。 植防、25(4):29~30。 (62)野口義弘(1972):殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食入ニカメイチュウ に対する降雨の影響。 徳島農試研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973):水田の節足動物相ならびに これに及ぼす殺虫剤散布の影響(第1報)水田の節足動物相概観。 昆虫、41(3):359~373。 (64)野口義弘(1973):水田線虫の検診方法の確立に関する特殊調査。 発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974):水田の節足動物相ならびに	· C
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想	:節
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想 応動昆、15(3):121~131。 (60)野口義弘(1971):殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。 応動昆講演要旨、7。 (61)山下定利(1971):簡易自動式予察燈の作り方。 植防、25(4):29~30。 (62)野口義弘(1972):殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食入ニカメイチュウに対する降雨の影響。 徳島農試研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973):水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第1報)水田の節足動物相概観。 昆虫、41(3):359~373。 (64)野口義弘(1973):水田線虫の検診方法の確立に関する特殊調査。 発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974):水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物群集における種数および生息密度の季的変動。 昆虫、42(1):87~106。	
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想 応動昆、15(3):121~131。 (60)野口養弘(1971):殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。 応動昆講演要旨、7。 (61)山下定利(1971):簡易自動式予察燈の作り方。 植防、25(4):29~30。 (62)野口義弘(1972):殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食入ニカメイチュウに対する降雨の影響。 徳島農試研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973):水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第1報)水田の節足動物相機観。 昆虫、41(3):359~373。 (64)野口義弘(1973):水田線虫の検診方法の確立に関する特殊調査。 発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974):水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物群集における種数および生息密度の季的変動。 昆虫、42(1):87~106。 (66)永井洋三(1975):イネ縞葉枯病後期発病の感染時期と防除適期。 発生予察特別報告、(26):92~95。 (67)柏木弥太郎(1975):葉いもちとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。 四国植防研、(10):1~6。 (68)野口義弘、谷本温暉(1975):ハスモンヨトウとネキリムシの生態と防除、ネキリムシ被害実態と経済的被害許容水準。研究成果、(82):140~149。 (69)野口義弘(1976):ケラ幼虫の発育と各種殺虫剤に対する感受性。 四国植防研、(11):23~28。 (70)谷本温暉・野口義弘(1977):ネキリムシ類の生態と薬剤防除。 徳島農試研報、(15):55~62。	·節
殺虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想 応動昆、15(3):121~131。 (60)野口義弘(1971): 殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。 応動昆講演要旨、7。 (61)山下定利(1971): 簡易自動式予察燈の作り方。 植防、25(4):29~30。 (62)野口義弘(1972): 殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食入ニカメイチュウ に対する降雨の影響。 徳島農試研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973): 水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第1報)水田の節足動物相概観。 昆虫、41(3):359~373。 (64)野口義弘(1973): 水田線虫の検診方法の確立に関する特殊調査。 発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口義弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974): 水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物群集における種数および生息密度の季的変動。 昆虫、42(1):87~106。 (66)永井洋三(1975):イネ縞葉枯病後期発病の感染時期と防除適期。 発生予察特別報告、(26):92~95。 (67)柏木弥太郎(1975): 葉いもちとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。 四国植防研、(10:1~6。 (68)野口義弘・谷本温暉(1975): ハスモンコトウとネキリムシの生態と防除、ネキリムシ被害実態と経済的被害許容水連。 研究成果、(82):140~149。 (69)野口義弘(1976): ケラ幼虫の発育と各種殺虫剤に対する感受性。 四国植防研、(11):23~28。 (70)谷本温暉・野口義弘(1977): ネキリムシ類の生態と薬剤防除。	
殺虫刺散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想、15(3):121~131。 (60)野口羞弘(1971): 殺虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。広動足満演要旨、7。 (61)山下定利(1971): 鶴島自動式予察盤の作り方。植防、25(4):29~30。 (62)野口養弘(1972): 殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食人ニカメイチュウ(ムオイン降雨の影響。後島貴武研報、(13):17~20。 (63)小林尚・野口養弘、日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1973): 水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物相楊制。良虫、41(3):359~373。 (64)野口蘿弘(1973): 水田総虫の検診方法の確立に関する特殊調査。発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口蘿弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974): 水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物群集における経数および生息密度の多的変動。昆虫、42(1):87~106。 (66)水井洋三(1975): (26):92~95。 (67)柏木弥太郎(1975): 衆いもらとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。四国確防研、(10):1~6。 (68)野口義弘、(1975): 衆いもらとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。四国確防研、(10):12~6。 (69)野口義弘(1975): 米1・4らとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。四国確防研、(10):15~6。 (69)野口義弘(1975): 東1・4らとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。西国権防研、(11):23~28。 (70)谷本温障・野口義弘(1975): ハスモンヨウとネキリムシの生態と防除、ネキリムシ被害実態と経済的被害許容水準。研究成果、(82):140~149。 (69)野口義弘(1976): ケラ幼虫の発育と各種殺虫剤に対する感受性。四国能防研、(15):55~62。 (71)小林尚・野口義弘(1977): ネキリムシ類の生態と薬剤防除、他島鼻武研報、(15):55~62。 (71)小林尚・野口養弘、(15):55~62。 (71)小林尚・野口養弘、(1978): 沿の東京と本植教出が取り、(1978): 北日の節足動物群集の組成に及ぼす殺虫剤散布の影響による海太統発。他島鼻武研報、(16):69~73。 (73)田中清・谷本温降(1978): ハイマグラノメイガ処女健成虫による性誘引作用。広島足満演要旨:3。 (74)谷本温摩・田中清・腰原連維(1978): ハイマグラノメイガの発育と温度、日長との関係。広島足満演要旨:26。	
登虫剤散布必要度合の予想方法に関する研究(第3報)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布必要度合の予想、15(3):121~131。 (60)野口業弘(1971): 穀虫剤散布後の降雨がニカメイチュウの防除効果におよぼす影響。応動昆溝演要旨、7。 (61)山下定利(1971): 蘭易自動式予察歴の作の方。植防、25(4):29~30。 (62)野口業弘(1972): 穀虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食人ニカメイチュウ(に対する降雨の影響。徳島農試研報、(13):317~20。 (63)小林前・野口養弘(1972): 殺虫剤散布後の降雨が防除効果に及ぼす影響(第1報)食人ニカメイチュウ(に対する降雨の影響。徳島農試研報、(13):359~373。 (64)野口義弘(1973): 水田線虫の検診方法の確立に関する特殊調査。発生予察特別報告、(25):110~119。 (65)小林尚・野口養弘・日和田太郎・金山嘉久正・丸岡範夫(1974): 水田の節足動物相ならびにこれに及ぼす殺虫剤散布の影響(第2報)水田の節足動物群集における種数および生息密度の季的変動。昆虫、42(1):87~106。 (66)水井洋三(1975): 才未葡葉柱所後期発病の威染時期と防除適期。発生予察特別報告、(26):92~95。 (67)柏木弥太郎(1975): 葉、いちとセジロウンカ、トビイロウンカの発生との関係。四国植防研、(10):1~6。 (68)野口義弘・谷木温曜(1975): 小スモンヨ・ウとネキリムシの生態と防除、ネキリムシ被害実態と経済的被害許容水準。研究成果、(32):140~149。 (69)野口義弘(1976): ケラ効虫の発育と各種殺虫剤に対する感受性。四国植防研、(11):23~28。 (70)谷本退曜・野口義弘(1977): ネキリムシ類の生態と薬剤防除、総島農試研報、(15):55~62。 (71)小林前・野口義弘(1978): が3報)水田の節足動物群集の組成に及ぼす殺虫剤散布の影響、患島農試研報、(15):53~62。 (72)野口義弘(1978): 絶島県におけるツマグロヨコバイのカーバメイト抵抗性の実態と複合剤による法式は果、徳島農試研報、(16):69~73。 (73)田中清・谷本温暉(1978): ハイマグラノメイガ処女離成虫による性誘引作用。応動民溝演要旨:3。 (74)谷本温暉・田中清・腰原達雄(1978): ハイマグラノメイガ処女離成虫による性誘引作用。応動民溝演要旨:3。 (74)谷本温暉・田中清・腰原達強(1978): ハイマグラノメイガ処女離成虫による性誘引作用。応動民溝演要旨:3。	
四国植防研、(4):65~75。 (56)以西信夫・柏木弥太郎・谷幸泰(1969):レンコンおよびイネを加害するイネネクイハムシの発生と防除。 四国植防研、(4):79~86。 (57)長江十一(1969):モモゴマダラノメイガの発生消長と防除(第1報)。 徳島良試研報、(11):33~34。 (58)永井洋三・須藤真平・日和田太郎(1970):徳島県におけるイネツトムシ第2世代の発生消長と薬剤防除。	